



239号

2018 / 12 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



豆腐売り：中国四川省ガンツー・チベット族自治州丹巴県の町の市場で自家製の豆腐を売る小母さん。お祖母さんの代からの豆腐店で丹巴一の人気店。日本人の私が他店と比べても美味しいと思います。朝9時前から夕方5時過ぎまで、家で作って市場へ運ぶと右から左へ売れて、小母さんは何時も嬉しそうな笑顔をしています。

(2016年5月、四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三撮影)

この四字成語は、私の手持ちの日本語で書かれた成語辞典には見当たりません。確かにこの四字の儘では、日本語として語呂が悪いですね。日本語の諺としては、「親しき中にも礼儀あり」が当たるでしょうか。意味する処は微妙に違うようですが。



春秋時代、晋の大臣^{キョウキ}臼季は冀^{キョウ}缺が畑仕事をしているところへ、妻が礼儀正しく丁寧に昼食を運んで来て、食事が終わるまで傍に控えているのを見かけました。彼ら夫婦は、他人も羨む仲睦まじさでした。

晋の国へ帰ってから、臼季は国王の文公に話しました。「冀缺と彼の妻は貧しくても、お互い相手を敬い客のよう^{ホウ}に接していて、彼が素養のあることを示しています。若し王様がこのような人間をお傍において、国を治める手伝いをさせたら、我が国はきっと強大な国になるでしょう」。

晋の文公は臼季の意見を聞き入れ、冀缺を召し出して大事な役職を与えました。

冀缺は、文公の期待を裏切ることなく、聡明な英知を働かせて、文公の政治を国内にゆきわたらせ、国の安定に大いに力を発揮しました。



言葉の意味：「敬」は「尊敬する、敬愛する」、「賓(賓)」は「客人」、この四字成語は、夫婦がお互いに相手を尊敬し、客に接するように丁寧に対応している様子を言う。

使い方：両親はいつも相手のことを思いやっていて、今迄に家事のことで喧嘩なんかしたことが無い。



この言葉を子供たちに教えるのは難しいですね。表面だけを説明したのでは、乱暴な言葉は使わずに、丁

寧に話せばよいのだと誤解されてしまうでしょう。

この反対の例も最近の日本では見られます。親はあまり親の権威を振り回さず、子供に近づいて育てるのが良いという説に乗って、子供に親の名前を呼ばせている若い親たちを時々見かけます。

古い人間のせいか、子供が親の名前を呼んでいるのを聞くと違和感を覚えます。悪いことではないのかもしれませんが、折角お父さんお母さん、あるいはパパ・ママという呼び名があるのに、わざわざ名前

で呼んでも、親しみが増しているようには感じません。却って、人生の先輩である大人に対して敬意を払う気持ちがなくなるのでは、と心配します。

それとは反対に、この四字成語を教えられた子供たちが、言葉・態度だけ丁寧にしたら、これも又おかしいですね。大人でも、唯丁寧にすればよいのであれば、慇

懃無礼になる心配もあります。

この言葉のポイントは、相手を思いやる気持ちではないでしょうか。相手を思いやる気持ちがあれば、時と場合にもよりますが、少々乱暴な言葉でも気持ちは相手に伝わると思います。

子供の教育は難しいですが、この言葉を教える時、先生方には臼季がどうして冀缺夫婦の様子を見て感銘を受けたのかをよく説明し、臼季が冀缺を推薦した理由、冀缺が国を上手く治めた理由が、「相手を思いやる気持ち」であることを子供たちにわかるように話して欲しいと思います。

最近の世の中、世界的に「自国第一主義」とか「排他主義」とかいう思想が台頭してきて、とかく住み難い世の中になって来ました。自分達だけでも時流に乗らないで、他人を思いやる気持ちのゆとりを持ちたいものです。



満柏氏画

Jūn shǐ chén yǐ lǐ
君使臣以礼

君、臣を使うに礼を以てす〈八佾第三〉

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

魯の国の君主定公が、孔子に次のような問いかけをしました。「君使臣，臣事君，如之何？(Jūn shǐ chén, chén shì jūn, rú zhī hé?)」(君、臣を使い、臣、君に事うること、之を如何)〈八佾第三〉。一国の君主がうまく臣下を使い、臣下がおとなしく君主に仕えるようにするにはどうしたらよいか、と。

定公は魯国第26代の君主で、孔子を高官に取り立てた人物でした。孔子の進言によく耳を傾ける実直さもありましたが、一方、意志薄弱で、政治的には無能な君主でした。実際の権力は、孟孫氏、叔孫氏、季孫氏という三家の貴族に分断され、国政は混乱していました。定公はこれに心を悩まし、孔子に、本来の秩序を取りもどす方策を求めたのでした。

孔子はかつて齊の景公から同様の質問を受けたとき、「君君。臣臣。父父。子子(Jūn jūn. Chén chén. Fù fù. Zǐ zǐ)」(君は君たれ。臣は臣たれ。父は父たれ。子は子たれ)と答えています〈顔淵第十二〉。君主は君主らしく、臣下は臣下らしく、父は父らしく、子は子らしくすべきだ。つまり、君臣、父子各々がそれぞれの分をわきまえ、その力を存分に発揮したとき、国の秩序は安定するというわけです。この意味では、孔子は身分制度の擁護者でした。しかしそれは必ずしも支配と隷属を無条件に肯定するものではありません。

定公の問いかけに対して孔子は次のように答えています。「君使臣，以礼，臣事君，以忠(Jūn shǐ chén, yǐ lǐ, chén shì jūn, yǐ zhōng)」(君は臣を使うに、礼を以てし、臣は君に事うるに、忠を以てす)。君主が臣下を使う際は「礼」に従い、臣下が君主に仕える際は「忠」を重んずべきだ、と。君主が臣下に対して忠誠心を要求するのは、事の良し悪しは

ともかくとして、誰もが理解できるどころです。しかし君主が「礼」を以て臣下を使うとは、一体どういうことなのでしょう。

孔子の生きた春秋時代には、まだ「法」の概念が確立していませんでした。社会秩序を保つ手段は「礼」か「武」かの何れかでした。孔子は必ずしも武力を否定してはいませんが、日常的な統治に暴力を用いることには反対しています。孔子が主張したのは「礼」による統治、いわゆる「礼治主義」です。礼治主義はまた徳治主義ともいわれます。

『論語』には次のような言葉が見えます。「人而不仁，如礼何！(Rén ér bù rén, rú lǐ hé!)」(人にして不仁ならば、礼を如何せん)〈八佾第三〉。「礼」といえば、誰しも儀礼とかしきたりのことを思い起こしますが、ただそれだけではありません。「礼」とは「仁徳」、すなわち人間らしい思いやりの心が形となって外に現われたもので、仁徳を失った儀礼は、何の意味も持たないということです。「礼」とはこの場合、儀礼を含めた日常の道德規範を意味します。孔子はまた次のようにも言っています。「己所不欲，勿施于人(Jǐ suǒ bú yù, wù shī yú rén)」(己の欲せざる所は、人に施す勿れ)〈顔淵第十二〉。自分がして欲しくないことは、相手にも押し付けるな、と。虐待されなければ、虐待するな。すべては相手が自分と同じ人間であることを認めることから始まります。

これは何も君臣関係に限ったことではありません。あらゆる組織の上下関係に当てはまります。権力を持つ者が持たないものを、上司が部下を人間として認め、人間として扱うこと。これは孔子の時代から現代へと続く永遠の課題なのでしょう。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(4)

寺西 俊英

3日目(5月22日)の朝が来た。5月22日は旧暦の4月8日、つまりお釈迦様の誕生日である。今日は、大明寺で何か催しものがあるかも知れないなと思いつつ外を見ると雨が降っている。雨だということに近くの寺まで散歩してきたという方もいた。朝食後ホテルの前で記念撮影し、9時過ぎにバスに乗り込んだ。今日は揚州を出発して鎮江に向かう。鎮江とは揚州と長江を挟むように位置している街である。「潤揚長江公路大橋」を通過して10時頃に長江沿いに建っている金山寺に着いた。

橋の名称の「潤」は、この橋の架かっている地区の昔の名前から採った。隋の時代、潤州という地名であったのだ。まもなく名前は変更されたが今でも鎮江市の6つの行政区の中に「潤州区」として名前が残っている。中国では、地名に「人民路」とか「解放路」、「中山公園」など昔の由緒ある地名をいとも簡単に変更しているが、一方で歴史を残す大切さも理解しているのであろう。なお「鎮江」の名前の由来であるが、ある中国人の論文の中に〈揚子江を鎮める〉願いから来ていると書かれていたが、なるほどと思った。揚子江(長江)にしても黄河にしても穏やかに流れているように見えて、数えきれないくらいの氾濫等により川の流れを変えている。後述の「金山」はその昔は、長江の中の小島であったが長江の流れによって陸続きになっている。次号で書く予定の「西津渡」も宋の時代は長江に面した港であったが、その地は今では住宅街や公園になっている。

ここで「鎮江市」の歴史を振り返ってみたい。中国に関心のある方はご存知であろうが関心のない方には聞いたことがない街と思うからだ。かくいう私も大連に勤務した時の2008年に社員旅行で行くまでは知らなかった。鎮江市はその昔「京口」と呼ばれ、三国時代(220年～280年)には呉の孫権が一時都を置いたところである。北宋時代(960年～1126年)から鎮江の名前が始まった。前後するが、隋の時代(589年～618年)到北京と杭州を結ぶ「京杭大

運河」が掘削され長江とも交差したが、この運河の恩恵を被ったのが交差点地点になった揚州と鎮江である。揚州と同様商業都市として発展した。交通の要衝の地となった鎮江は近代になって歴史の表舞台に何度も登場するようになった。年代別にポイントを箇条書きにすると以下の通りである。

1842年7月:アヘン戦争後期にイギリスが鎮江を占領。

1858年:英仏連合軍が清朝の弱体化の中で攻め入ったアロー戦争後の「天津条約」で条約港に指定される

1861年～1927年(66年間)英国租界が置かれ、英国領事館が設けられた。

1929～1949年:鎮江に江蘇省政府が置かれた
1949年:中華人民共和国成立、江蘇省の省都は南京に移された。

1986年:「国家歴史文化名城」に指定される。

さて、鎮江市の長江沿いには小さな山が3つある。「金山」、「北固山」、「焦山」である。金山はかつて小島であったが、前述のように長江の流れが北にずれたことにより陸続きとなった。高さがわずか43mの金山に建てられたのが金山寺である。創建は東晋(317年～420年)の時代で境内には多くの建物があり、金山は寺院の中に埋もれているかの如くである。中でも高さ30mで八角7層の「慈寿塔」がひと



金山寺入口、雨にたたられた一日でした



北固山頂の寺院から長江を望む

きわ目を引く。慈寿塔は1400年余りに建てられ、かつて2度壊されてしまったが現在の塔は1894年頃、金山寺の僧侶によって再建されたものだ。実は1467年から2年間、禅と水墨画の修業のため遣明船で明に渡った「雪舟」は、金山寺が大変気に入ったようで「大唐揚子江心金山龍遊禪寺之図」を描いているが、慈寿塔が印象的に描かれている。この絵画は京都国立博物館蔵であり、ネットの写真でしか見ていないがとても素晴らしい絵画である。是非京都に行って見てみたい。当日は金山大門をめぐり並木道を歩き慈寿塔まで行ったが、何しろ雨が強くなりゆっくりと回れなかったのが残念である。本当は、近くにある「天下第一泉」を見る予定であったが早くバスに戻りたいということになった。ここはまた「牛郎織女(牽牛星と織姫星)」など中国四大民間話の一つであり、「白蛇伝」の舞台の一つとして杭州の西湖と共に有名である。白蛇伝は、何向真さんが上梓された「蒼海拾貝」に詳しく書かれているのでご覧になることをお勧めしたい。

中国各地を巡る中で、前述のように日本との接点に出会うのは嬉しいことである。その観点で一つ加えれば、「金山寺みそ」がある。この味噌の由来は諸説あるようだが、空海が金山寺から持ち帰ったとも言われている。真実は分からないがそうあって欲しい。

我々はホテルに向かいレストランで昼食を摂ることとなった。昼食だということにこれでもか、というくらい料理が出て来る。雨も小降りになったので午後1時過ぎに「北固山」に行くことになった。前述のように2008年に鎮江市に来たが、金山はその時行かな

かった。北固山は丁度10年振りで2回目である。この山も高さ53mと小さな山であるが、三国志の舞台の一つであり多くの話が残されていてとても有名である。まずは劉備玄德と孫権が曹操を倒す計画を練った場所ということだ。北固山は山全体が公園となっているが、入口の牌坊をくぐると小さな鳳凰池がありそこに真ん中が大きく裂けた岩がある。2人は剣でそれぞれこの岩を切り、どちらが天下を取れるのか占ったと伝えられている。まさか剣で岩を切り裂けないのでもともと裂け目のあった岩を見た誰かの創作であろう。岩の名前は「試剣石」と名付けられている。観光客は説明版を見て〈然もありなん〉という顔をしてじっと見ている。池のそばを通り頂上に続く道を登ると、阿倍仲麻呂の例の有名な句が刻まれた歌碑があった。いつ頃か分からないがこの地を訪れている。ここでも日本との接点が見られ嬉しく思った。まもなく頂上に着いた。そこには甘露寺、北固楼、多景楼などの寺院がありそのうちの一つ、甘露寺に入った。三国時代(220年～280年)の265年創建だそう。この寺院は、劉備が孫権の妹(孫尚香)と見合いをし結婚した所とされる。それから北固楼と多景楼に登って見ると、滔々と東流する長江、また大運河が長江に流れ込む絶景を眼下に今回も見ることが出来たが何度見ても雄大な景色は素晴らしい。

3つの小山があると言ったが、もう一つの「焦山」は時間の関係で見られなかった。北固山のすぐ東にある、長江の中に浮かぶ高さ70mの小島である。資料によれば、〈全山緑に覆われ、水面に浮かぶ碧玉のように見えることから「浮玉山」とも呼ばれている〉そうである。焦山に行くにはロープウェイか渡し船で行かねばならない。しかし何百年後には金山のように陸続きになるかも知れない。いや、何十年後かもしれない。この小島にも寺院がいくつも建っているが、清の康熙帝が命名した「定慧寺」が有名である。もう一つの見どころは、アヘン戦争時清政府が8座の大砲を設置しイギリスに対抗した「砲台遺跡」があり公開されているそう。

次号では歴史のある「西津渡街」および鎮江名物の「香酢」を紹介し、次の訪問地の「無錫」について書いていきたい。

(続く)

東西文明の比較(30)

▼「古事記」と「日本書紀」について▲

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

日本最古の書物と言われている「古事記」と「日本書紀」、これを「記紀」と呼んでいることはご存じでしょう。この「記紀」は、中国の「史記」をはじめとする王朝史、旧約聖書、ギリシャ神話に並ぶ世界に誇るべき歴史書であると言われています。

今回は、その極く一端に触れてみたいと思います。なお、「記紀」の解釈については、諸説ありますが、断定的に述べることをお許し願いたいと思います。

🏰 その編纂の背景

当時、東アジアを巡る情勢は極度に緊張していました。

663年、唐・新羅による攻撃で百済が滅び、これに対して倭国が百済の遺臣たちを助けて百済再興の軍を起こします。しかし、この戦い(白村江の戦い：663年)は失敗に終わります。668年には唐の三次にわたる遠征により高句麗が滅び、そして、唐と新羅の間で戦いが始まります。このため唐と新羅は、倭国を自陣営に引き込もうと、それぞれから使者が来ます。天智朝、天武朝のころです。

倭国は、こうした異国との外交・軍事情勢を背景に、自国でも大陸の王朝に習い国史を編纂して、他国に侮られないようにしなければという気運が高まりました。また、虚実がまじりバラバラになっている帝起・旧辞などの史料を早くまとめておかねば、という気風が起きていました。

🏰 天皇家支配を正当化しようとした「古事記」

「古事記」の編纂を指示したのは天武天皇(在位：672～686年)です。天武天皇は、「帝紀」という皇室系図と、「旧辞」と呼ぶ神話や伝承に誤りが多いので、稗田阿礼にこれらの両書を精選させ、全てを暗誦させました。その後、阿礼が年老いて口承が絶えてしまうのを心配した元明天皇(707～715年)が、太安万侶に命じて阿礼の語りを筆録

させたと伝えられています。これが「古事記」です。同書は、上・中・下の三巻で構成され、建国神話にはじまり推古天皇(592～628年)の時代までが載録されています。

🏰 外国の目を意識した「日本書紀」

「日本書紀」も天武天皇の命によって編纂されました。完成は、古事記に遅れること8年後です。「帝紀」と「旧辞」を原本としながらも、中国・朝鮮の正史や日本の古記録を取り入れ、巻数も三十巻、系図一巻という膨大なものとして、元正天皇(在位715～724年)の時代に完成しました。神話から持統天皇までが詳しく収録されています。中心編者は舎人親王(天武天皇の皇子、淳仁天皇の父：676～735年・享年60歳)と藤原不比等(天智天皇から藤原の姓を賜った鎌足の子：659～720年・享年61歳)です。

純粋な「漢文」で書かれていることから、唐や新羅の人の目に触れることを意識した可能性が高いでしょう。

🏰 「古事記」と「日本書紀」のちがいは何処にあるのか

「古事記」のほうが物語性が強く、読み物としては面白いが、「日本書紀」の内容とそれほど大差はありません。両書の前半部分は、神々が活躍する日本神話が詳しく述べられています。

ではなぜ、同時期に似たような歴史書が二つも作られたのでしょうか。

それは、編纂目的が異なるからです。

「日本書紀」は、古代中国がやってきたように、「正史」として編まれた公式記録であり、これ以降も「続日本紀」、「日本後紀」というように、「日本書紀」に続いて五つの正史の編纂が続けられ、全体で「六国史」となります。これに対して「古事記」は、天皇家に保存される私的な蔵書という性格を持ち、単発で終わっています。

ちなみに、両書で述べられている「日本神話」は、東南アジアの神話を骨格としながら、中国・朝鮮、南太平洋、さらにはギリシャ神話の影響まで見られるといわれています。両書では、そんな神話が無理なく天皇家に繋がるように、巧く編纂されてい

ます。つまり、これによって、天皇家は神聖性を帯び、国民支配の正当性が主張できたのです。さらには、天武天皇や藤原不比等など、編纂に関わった実力者に都合の良い改変がなされており、史書編纂の狙いは、まさに己の権力を正当化することにあったといえるのではないのでしょうか。

「推古天皇紀」は空白が目立つ

推古天皇は在位36年で亡くなりますが、治世の前半、聖徳太子が活躍した頃の記述が、極端に少ないのです。推古天皇の信任を受け、蘇我一族と協力して仏教の伝播を成功させた聖徳太子の功績を”無視”することは、蘇我氏と争っている藤原一族(主編者の藤原不比等)としては当然のことでしょう。その少ない中から記述された幾つかの事例を拾ってみましょう。

- 推古元年(593年)、法興寺の心礎(塔の心中の礎石)に仏舎利を納めたこと、厩戸皇子を皇太子に冊立し、摂政に任じたこと。用明天皇(在位：585～587年)を埋葬したこと。四天王寺を建てたことが記載されるのみです。
- 推古二年の項では、皇太子と蘇我馬子に仏教を興隆させたこと。諸臣等も競って親の恩のために寺を建立したこと。(馬子：敏達朝で大臣に就き、用明・崇峻・推古の4天皇に仕え、54年にわたり権勢を振るい、蘇我氏の全盛時代を築いた)
- 推古三年は、淡路島に香木が流れ着いたこと。高句麗の僧惠慈が帰化し、皇太子が師事したこと。百済の僧慧聡が来日したこと。
- 推古四年には、11月に法興寺を造り終わり、蘇我大臣の子善徳を寺司に命じた。惠慈と慧聡を法興寺に住ませた。これだけで1年の記事が終わります。
- 推古五年も寂しい記事です。4月に百済王は、王子阿佐を遣わし、朝貢した。11月に難波吉士磐金を新羅に遣わした。
- 推古六年4月、難波吉士磐金が新羅から帰り、鶺鴒二羽を献上した。これを難波杜で飼わせた。そうしたら、枝に巣を作り子を産んだ。8月には新羅が孔雀を一羽献上した。10月越国が白

鹿を1頭献上した……。これだけです。

日本列島の天災

日本初の地震の記録は「巻十三允恭天皇(在位：412～453年)の5年7月に短く「地震る」とあります。この年が西暦何年かは判りませんが。その後、6世紀末から天災記録が続きます。

- 推古七年(599年)4月27日、地震があり、家屋が壊滅した。そこで四方に命じて地震の神を祀らせた。
- 天武四年(675年)、11月「この月、大きな地震があった」とあります。
- 天武六年5月、「日照りが続き雨乞いをした」とあり、6月14日には「大きな地震があった」と述べられています。
- 天武七年12月の条には、九州筑紫国で大地震が起きた。幅二丈(一丈は約3メートル)、長さ3000余丈にわたって地面が裂け、百姓の家は村ごと倒壊したと、あります。このとき五馬山(大分県日田市)の一部が崩壊して温泉が出ました。
- 天武八年、九年、十年、十一年と立て続けに「地震る」と記述があります。
- 天武十三年(684年)10月14日には甚大な被害をもたらした巨大地震が起きました。人々が寝静まったころです。山は崩れ、川は溢れた。諸国役所の倉庫、寺塔、神社のたぐいも倒壊、その数計り知れず。人や家畜の多くが死んだ。田畑五十四万頃(しろ：約1200ヘクタール)が埋もれて海になった(地盤沈下)。大音響がした。伊豆島(大島)の西と北の二つの面が、自然に300余丈隆起して、新たな島になった。土佐では、大潮がたかく上がり、海水が満ちあふれ、寄せてきた。調を運ぶ船の多くが転覆して無くなった。これがいわゆる「白鳳大地震」で、南海トラフ巨大地震のことです。東海地方の地震を誘発したことも記されています。

今から1334年前の大地震、この再来があってもおかしくないといわれています。

皆さん！気をつけましょう。

四川省北西部に在る丹巴などの女王谷(ギャロン)と周辺、それにチベット東部に高い石積みの塔が多く残っています(写真1、2、3)。これらの高い石積みの塔の歴史は記録されておらず諸説有って、数千年の昔に南下して来た羌族が伝え各地に建てて行ったとする学説が当地で広まっていますが、遊牧民だった羌族が何故高度な建築技法を要する高い石の塔を谷間の其処彼処に建てられたのか、素朴で根本的な疑問が残ります。

女王谷の地に係る歴史書を見る限り、高い石の塔が最初に出て来るのは、女王谷(ギャロン)に住む人たちの祖先の地と言われる、隋書に記録されたチベット西部の女国や、唐書に記録された女王谷に当る東女国に出て来る「女王が住む9層の塔を持つ館(写真4)」です。この石材を僅かに内側に傾けながら高く頑丈に石を積む建築技法が移民によって女国から東女国へ伝えられ、更にギャロンチベット族の勢



写真1

力が拡大した時に周辺へ伝えられたように見えます。この考え方は、チベット西部の女国から女王谷の東女国への移民経路だったとされるチベット東部のゴンブー地方に約1800年前に建てられた高い石積みの塔^{注)}が残っている事からも裏付けされます。

高い石積みの塔は頑丈に建てられてはいますが、地盤が弱くなったり地震のために傾いて崩れそうになり対応に苦慮してい

るケースも有ります。

同じ建築技法の高い石積みの塔は中央アジアでも見られます。またコーカサス地方グルジアのスワネティ(スワネッティ/スヴァネチ)地方にも建築技法が異なるものの高い石積みの塔が残っていて「過去数百回の侵略を守り抜いた石塔」、「狭隘な渓谷に多種多様な民族が集う」、「非常に気品のある美人が多い」との言われはギャロンの丹巴に通じる物があり、スワネッティアの美人に似た顔立ちの女性を丹巴で時々見掛けます。

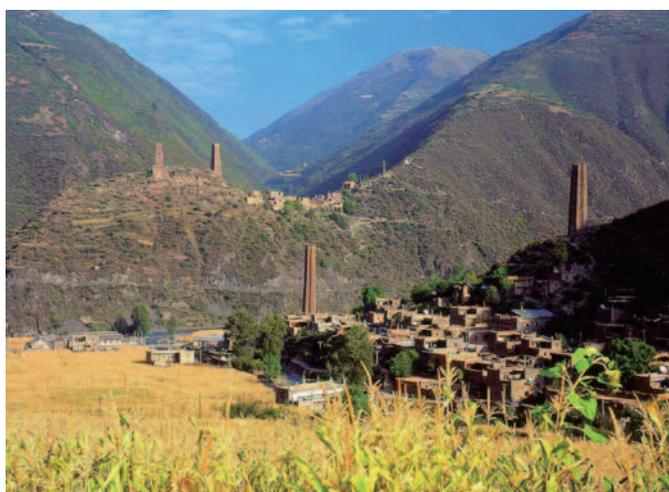


写真2



写真3



写真4 女王谷と周辺で唯一残る「女王が住む9層の塔を持つ館」を彷彿とさせる領主の館跡が丹巴に有ります

注) 2008年、アメリカのBeta-Analytic Lab.の放射性炭素C¹⁴年代測定に因る(四川大学 Unicorn 文化遺産研究所、Frederique Darragon)。

●大川さんのホームページはこちら

<http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▶お知らせ：女王谷のHP

(<http://rgyalmorong.info/>)に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ(MP4形式8MB前後)1分余り×15本を追加しました。日本語HPに入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。

(<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

「漢詩の会」たより②④ りんしょう りんあん てい 林升の「臨安の邸に題す」

(2018年10月7日)

りえき じゅこうじょう のぼ 李益の「夜受降城に上りて笛を聞く」

報告：花岡風子

今回、最初の一首は南宋時代の7言絶句「臨安の邸に題す」でした。日本では、漢詩といえば、唐詩ばかりが有名で、宋詩はさほど知られていませんが、今の中国人には宋詩の方が唐詩よりもわかりやすく、親しみやすいようです。

qī lín ān dī lín shēng
題臨安邸 林升

shān wài qīng shān lóu wài lóu
山外青山楼外楼

xī hú gē wǔ jǐ shí xiū
西湖歌舞几时休

nuǎn fēng xūn dé yóu rén zuì
暖风熏得游人醉

zhí bǎ háng zhōu zuò biàn zhōu
直把杭州作汴州

りんあん てい りんしょう
臨安の邸に題す 林升

さんがい せいざんろうがい ろう
山外の青山楼外の楼

せいこ かぶいず としき つかやまん
西湖の歌舞幾れの時にか休まん

だんぷうかお ゆうじんよ
暖風薫り得て遊人酔い

た こうしゅう と べんしゅう な
直だ杭州を把りて汴州と作す

この詩は、中国では小学校の教科書に載るくらい有名な詩だそうですが、作者は南宋の林升という生卒年すら分からない人物です。しかもこの一首しか残っていないという、正真正銘の一発屋詩人です。

果たしてこのまま、この繁栄に酔いしれていいのか、と憂国の情を暗示した最後の一句が非常に有名なのだそうですが、それにはこの詩が書かれた歴史背景を知らなくてはなりませんね。今回も植田先生の歴史講義から始まりました。

宋王朝の後半(南宋)は、異民族の金に北半分の領土を取られ、臨時の都を杭州の地に置いたまま、モンゴルに滅ぼされるまで150年も持ちこ

たえました。しかも経済的には繁栄を極めていました。臨安とは、臨時の都という意味です。この間、武力に訴えてでも北方領土を取り返すべき、という主戦派と、経済的な繁栄に甘んじ、屈辱を忍んででも戦わずに和議を結ぼうとした主和派とに分かれて抗争が続きました。詩人の多くは主戦派だったようです。なお、ここでいう「邸」とは旅館のことです。「題」とは、書き付けるという意味です。恐らく旅館の壁か何かに書き付けたために残ったものかと思われます。作者自身が付けた題名かどうかはわかりません。「西湖」という題名のテキストもあります。

さて、この時代の主戦派の代表が岳飛がくひでその反

対が秦檜しんかいです。この二人の抗争も日本ではあまり知られていませんが、中国では芝居や物語を通じて、知らない人がいないほど有名な歴史事案です。救国の英雄と言われた岳飛を謀殺した秦檜は、売国奴として名を残しています。『宋史』では「姦臣伝」にその名が見えます。

明代には岳王廟の前に罪人姿の秦檜夫妻の銅像が作られ、中国人観光客は、この像に憎悪を込めて罵倒したり、唾を吐きかけたりしていました。(最近では「像に唾を吐いたり、叩いたりしてはならない」という掲示がされるようになったらしいですが。)
「過去は水に流す」「死んだらみな仏」という日本人感覚を持つ私などからいうと、たとえ歴史上の悪人であっても、そこまで感情移入できないなあ、と感覚の違いを感じざるを得ないのですが、きっと日本でいう『忠臣蔵』のように、国民的感情を掻き立てる歴史事案なのでしょう。

詩の意味は、「西湖の歌舞はいつ終わるとも知れず続いている。人はみな薫る春風に酔いしれて」と美しい杭州の都の繁栄ぶりと、人々がその豊かさに酔いしれている様を伝えています。そして最後に「人々は臨時の都杭州を、占領された本来の都、汴州べんしゅう(今の河南省開封市)だと決め込んで憚らない」と風刺しています。異民族に取られた北方領土のことを忘れて、今のように遊び惚けていいのか？というこの最後の一句が、中国人の愛国心にピタッと来たからこそ、この詩は千年読

み継がれてきたようです。ちなみに一句目の楼外楼という三文字は中華料理屋さんの名前にもなっているようです。

音読してみると、平仄もしっかりしていて、非常に朗読しやすい詩であることが分かります。いつものように、先生のお手本をじっくり聞いた後、一人一行ずつ順番に音読練習をし、その後一人ずつ一首を通して朗読します。七言絶句は四文字目の後ろでポーズを入れ、4・3のリズムで読むので、参加メンバーは、原文の音を十分に感じる事が出来ます。今日は植田先生から「後ろの三文字の後ろにポーズを入れると、四拍子になる」と言われ、本来、音のない後半三文字の後ろに頭のなかで「ウン」を入れて、四拍子で読んでみました。すると不思議と新鮮な感覚をおぼえました。

二首目は中唐初期の詩人李益りえき(748～829年)の「夜受降城に上りて笛を聞く」という詩でした。日本ではあまり知られていませんが、中国では、やはり知らない人のいない、著名な作品の一つだそうです。

李益たいれきじっさいしは大暦十才子(大暦とは代宗治下の年号で776～779年まで)と呼ばれた英才の一人で、高名な詩人でもあります。若い頃はなかなか出世の機会に恵まれず、節度使の幕僚として、西の辺境に赴いた経験があります。

漢詩の中には辺塞詩という、主に辺境の地にかり出された兵士達の気持ちを詠ったジャンルがあ

りますが、多くは現地経験のない詩人が想像だけで作ったものです。その中に在って、李益は従軍経験者であり、それだけにこの詩は実感がこもっています。

前半二句はどこまでも続く砂漠の風景と霜のように白く冷たく光る月の情景という、視覚に訴える

yè shàng shòu xiáng chéng wén dí
夜上受降城闻笛

李益

huí lè fēng qián shā sì xué
回乐峰前沙似雪

shòu xiáng chéng wài yuè rú shuāng
受降城外月如霜

bù zhī hé chù chuī lú guǎn
不知何处吹芦管

yí yè zhēng rén jìn wàng xiāng
一夜征人尽望乡

じゅこうじょう のぼ
夜受降城に上りて笛を聞く

李益

かいらくほうぜんすな
回楽峰前沙雪に似て

じゅこうじょうがいつき
受降城外月霜の如し

いず ところ ろ かん
知らず何れの処か蘆管を吹く

せいじんことごと きょう
一夜征人尽く郷を望む

描写です。三句目は、そこに何処からともなく笛の音が聴こえてくるという、聴覚の世界。そして最後の一句では、笛のもの悲しげな音とともに、望郷の念に駆られる兵士たちの心のうちへと迫っていく、という見事な構成になっています。たった28文字で、茫漠たる大砂漠を包み込むこの感覚。ロマンを感じますね！

さぞかし作者の李益も男らしい素敵な人に違いないと思いきや、植田先生が「この人はね、傲慢な性格でね」と言われたのでとても意外でした。「また嫉妬深いことでも有名でね、正妻と妾が何人かいたのだけど出掛けるときは、それぞれの部屋に鍵をかけた上、部屋の前に灰を撒いて、侵入者がいれば分かるようにしていたというんですよ」と。

そして、しまいには、「^{かくしょうぎょくでん}霍小玉伝」という伝奇小説の主人公になったそうです。その話の内容は次のようなものです。

李益が科挙を目指していたころ、没落貴族の娘で遊女に身を落とした小玉と相思相愛の仲になりました。彼女と将来を誓っていたにもかかわらず、科挙に及第して帰郷した彼は、母親の勧めで母方の従姉妹を正妻に迎えます。それを知った小玉は傷心のあまり病気になり亡くなってしまいました。

それ以来、彼が新しい妻を迎えると、必ず隣に若い男の幻が現われ、その度に李益は嫉妬に狂って妻を離縁することになり、そんなことが何度も続きました。それは、亡き小玉の祟りだということです。この物語はかなり有名になり、後世まで読み継がれ、芝居にもなって人気を博しました。

「ま、そんな事は実際にはなかったと思いますけどね、彼の態度があまりにデカくて傲慢だったから、こんな風に書かれちゃったんでしょうね。人間、やっぱり謙虚でないといけませんね」と植田先生。この小説の作者蔣防は時の政界におい

て、李益の反対派に属していたので、李益を貶める為に書いたという説もあります。

「美しく見事な詩の出来ばえと、作者の人間性のミスマッチが面白いね」と植田先生。作品からイメージする作者像に、ここまで想像を裏切られたのは、私も初めてでした。しかし、「ミスマッチをも愉しむ」。これは今回植田先生に学んだ新しい詩の鑑賞法と言えるでしょう。

さて、今回のみならず、これまで漢詩の作者たちを詩人として扱ってきましたが、中国にはかつて詩人という職業はありませんでした。李白も杜甫も一度は官職に就いています。特に中唐以後は、お役人になるための試験である科挙に詩文が重視されるようになったため、当時の受験生にとって、作詩も必須科目となりました。お役人に限らず、知識人は必ず詩を作らなければなりません。平仄や韻を整えたり、対句を考えたりしているうちに、バランスの取れた人間性が養われる、と考えられていたのでしょうか。

しかし、千年詠み継がれる名作は決してエリート官吏たちの受験の産物ではなく、杜甫や李白を代表とする、体制からはじき出された、いわばアウトローたちのものが殆どです。高級官吏を目指した白居易や柳宗元も、苦い左遷経験の中から多くの名作を生み出しています。名作とは、「飼いならされた」思考のなかでは生まれないものだと改めて感じます。枠の外にはみ出で、非難され、排斥され、たとえひん曲がってしようと、常識を超えた角度からモノを見て初めて、隠された、見えない大切なものに光を当てることが出来る、と感じました。

筆者アラフォー女子もこの歳になると、遠慮もだいが薄れ、怖いものも減り、ふてぶてしくなってきました。だからこそ常に「世俗に飼いならされない」視点を持ちたいと思う今日この頃です。



海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑩)

高島 敬明

今回は、寺島儀蔵さんにスポットを当てて書いていきます。彼は当時のソ連が指導する共産主義に未来の希望を抱いて越境入国したにも拘わらず、思わぬ運命に翻弄され苦難の道を如何に歩んで行ったか、一方で望郷の念が強まるばかりとなった人生について本人の語り口に沿って見て行きます。従って話が前後したり、記憶違いがあるかも知れませんがその点ご容赦ください。

「私は、東京大学3回生で日本共産党員だった時、仲間と鶴見の激しい労働争議に参加しました。その争議が終わってから危険人物として特高(特別高等警察)が四六時中身边を監視し、付きまとわれるようになりました。いつも顔を合わすわけですから、いつの間にか若い警官とも仲良くなって行きました。札幌に帰郷していた昭和10年(1935年)秋頃、若い警官から『寺島さんこれから一週間講道館で柔道の試合があるのでじっとして下さいね』と、何回も念を押され『分かりました』と答えました。ようやくチャンスが来たのだと、すぐに身の回りの用意をして、両親へ自分の写真など形見として残し、札幌駅に急ぎ、まず夜行列車に乗り込み稚内に行きました。北海道の地政学上まず樺太(サハリン)を目指し、連絡船に乗り樺太の豊原(ユジノサハリンスク)に着き、国境に通じる国道をまっしぐらにバスで北上しました。【注・当時樺太は1905年(明治38年)に日露戦争に勝利し北緯50度以南は日本の領土になっていた】国境が近くなってバスを降り、国道から200m位の林の中を進みました。短靴のくるぶしあたりまで苔の冷たい水に浸かりながらざくざくと音を立て先に進んで行き、やっと国境に着いたのです。日本側の警備は手薄で簡単にソ連側に着きました。高さ8mくらいの塔の上にソ連兵が機関銃を構えて警備していましたが、異常に気付いたソ連兵にすぐに逮捕され手荒に手錠を掛けられました。その日のうちに船に乗せられソ連

本土に送られ、シベリヤ鉄道で厳重な監視のもとモスクワに運ばれました。すると待遇が一変し、クレムリンの一室を与えられ日本のソ連大使館でコックをしていた人が食事などの世話に就く厚遇を受けました。それから2~3年はその状態が続き、その間北京に行き日本共産党の幹部の方々、T氏、M氏、N氏…何人かの方に会って会談をしました」。

その方々には何度か会われたようでしたが、話しぶりが目下の人を呼ぶように、T君、M君、N君などと親しそうに話されていました。

「モスクワでの生活を送っていたある日の事です。第二次世界大戦が近づいたころ非常に世情が悪化してきました。心配していた矢先何も悪いことはしていないのにスパイ容疑で逮捕・収監され、裁判の結果死刑の判決を受けシベリヤの強制収容所に送られることになったのです。収容所を転々とする中、何回も死刑の判決を繰り返し宣告されました。ある監獄では5人ぐらい入っている石牢で、周りを見れば写真に出ていた大臣だった人、元帥だった軍人、高名な一般人が膝を折って座っていました。時間が来て一人一人呼ばれていきますが誰一人帰って来ることは有りませんでした。皆さん分かっていたましたが、私の隣の人は全て処刑されたと話していました。なぜか私のところで呼び出しがいつも止まり、死刑は免れてきました」。

ここまで聞いてから質問しました。

「罪状は何だったのですか?身に覚えは有るのですか?」

寺島さんは、

「身に覚えのないスパイ罪で裁判にかけられました。貶められたのです」

とうめくように言われました。裁判の度に死刑判決が出るので都度大変怖い思いをされたようです。さらにこのような事を話されました。

「監獄での緊迫した日々が続きましたが、刑はど

ういう訳か25年に短縮され、強いられた監獄生活も18年で終わることになりました。この時46歳でした。その間に同じラゲリの囚人だったラージャと釈放後にふとしたことで再会し、連れ子の男の子共々結婚し、モスクワで主に通訳で生計を立てていました。生活が安定したとはいえ、望郷の念は次第に強まるばかりでした。釈放後、何度も帰国の嘆願をしたのですが全く相手にされませんでした。そのような時次のようなニュースを聞きました。岡田嘉子さん(脚注参照)に関するニュースです。当時日本で人気のあった大女優の岡田嘉子が愛人と樺太から同じように共産主義の理想に憧れ昭和13年にソ連に越境しました。愛人はまもなく処刑されたのですが、岡田さんは10年くらい監獄で過ごした後モスクワの病院で看護婦をしていたそうです。その後月日が経ったある時、岡田嘉子さんが日本に一時帰国したニュースを聞きました。自分もと勇んで日本大使館、ソ連当局にビザの発給を求めましたが回答は一回もありませんでした。それでもと繰り返し申請をしましたがすべて回答は有りませんでした。人伝に聞こえてくるのは、岡田さんの場合は日本の政治家、国会議員など多くの人が身元保証人になりやっと実現したとのことでした」。

と、やるせない表情でお話しになりました。私は、寺島さんは北京で共産党の幹部とも話す機会も持ち、しかも共産黨員なのになぜ共産党の国会議員などが保証人にならなかったのか、と思うばかりでした。思い起こせば、ノーベル文学賞のソルジェニーツィンも「収容所列島」にあるようにシベリア送りの受刑者でした。シベリアに送られた人は国外には絶対出さないのが原則です。ノーベル賞の授賞式にも出席できなかったのです。ただ当時1ルーブルが300円の時代に、ソ連の一般の人が月30ルーブルの年金であったのに対し、シベリアに送られ釈放された人は月80ルーブルの年金を貰い破格の待遇だったと言います。国家の恥じになるようなことを国外で話されないよう国内で生活して欲しいと言うことでしょうか。

あるとき私は、「寺島さん、ソ連に来て本当によか

ったのですか？ 寺島さんの人生は幸福だったのですか？」と聞いたことがありました。長い沈黙があって次のような返答がありました。「高島さん、私はモスクワで通訳をしていました。日本から多くの国会議員の方、偉い学者の方々が理想の社会の見学に来られました。学校、幼稚園、病院と多くの施設をご案内しましたが、日本に帰られる時には今までの考えを変えて帰られる方が多くいました」。これが答えだったように思います。このように間接的に自分の意見や意思を表現することがしっかり身に付いていたようです。今回はここまでで終わります。最後に「岡田嘉子」について経歴などを紹介します。(続く)

【岡田嘉子】 女優、アナウンサー。1902年広島市で生まれ、1992年モスクワの病院で逝去。(享年89歳) 東京・女子美術学校西洋画科に入学。1917年父が小樽の「北門日報」の主筆に招かれ、彼女も卒業後「北門日報」の婦人記者となる。1919年父が芸術座の北村抱月や劇作家の中村吉蔵等と知り合いだったこともあり父と一緒に上京した。そうした関係でこの世界に入り、際立った美貌も相俟って評判となり一気にスターダムの頂点に立った。サイレント映画時代のトップ女優。後年、人気番組「徹子の部屋」にも出演。

岡田は、多くの浮名を流したが共産主義者の演出家・杉本良吉と激しい恋に落ち、昭和13年(1938年)1月厳冬の樺太からソ連に越境した。過去にプロレタリア運動に関わった杉本は執行猶予中で、召集令状を受ければ刑務所送りになることを恐れ岡田嘉子とソ連に不法入国した訳である。しかし二人へのソ連の対応は厳しいもので、3日で二人は別々の収容所に引き離され杉本はこの年の10月スパイ罪で銃殺刑となった。

岡田は自由剥奪10年の刑となった。月日は流れ、1972年、70歳の時東京都の美濃部都知事らの働きかけで帰国することが出来た。(この時寺島さんは63歳)日本でも活躍したが、やはりソ連で暮らしたいとモスクワに戻った。



岡田嘉子 (Wikipediaから)

私たちの村は小さな村だった。学校も小さく、たった一間の教室と、たった一人の先生、そして二十数人の生徒と鐘が一つあるだけだった。私が学校に入った年、勢い良く動き回る十数人のいたずらっ子たちに先生一人では太刀打ちできず、騾先生(ラバ先生)に応援を頼み、私たちを教えに来てくれることになった。その当時すでに先生は六十歳を超えた老人だった。

決して先生の苗字が騾(ラバ)というのではなかった。本当の名前は李洪騾、幼い時には騾駒子(ラバの子)と呼ばれ、字の上手な先生だった。学校の庭の奥には一本の榆の老木があり、その樹のてっぺんは枝や葉が生い茂り、天をさえぎり、日陰をつくっていた。その樹の枝に鐘が掛けられていた。ダーン、ダーン、ダーン、時を告げる鐘の音は高く低く、遠くから、しかしはっきりと聞こえてきた。教室はボロボロになった古い窯洞(ヤオトン)で、中は土間があるだけの暗くガランとしたものだった。土間に作った炉からは煙が漏れブスブスとくすぶって、終日白い煙が上がっていった。煙が緩やかに立ち昇っている中で騾先生は私たちに字の書き方や読み方、数の数え方を教えてくれた。

騾先生が私たちに字を教えてくれるときには、紙も筆も使わなかった。何をを使うかと言うと、それは手の指と鉢だった。鉢の中にいっぱいになるまで細かい砂のような黄土を入れ、指でその上をなぞり、字を書く。表面が字でいっぱいになったら、鉢を揺すり、土を平にする。すると、字は消えてしまう。再び書く、いっぱいになる、そしてまた揺する。“人、牛、馬、大、山、水、長・・・”いくつもいくつもの字が鉢の中に現れ、消えてゆき、一つ一つ私たちの頭の中に刻まれていった。ラバ先生は口の端にキセルをくわえ、私達の様子を見ては、ススーッとタバコを吸っていた。先生の半分くたびれた羊皮の上着は油でテ

カテカとしており、腰からは同じように黒光りした羊の皮でつくった煙草入れがぶら下がっていた。

“ダーン、ダーン、ダーン”授業が終わると外へ土を取りに行ったものだ。榆の老木の下にある土塀のところは私達の小さな頭で一杯になった。たくさんの小さな手、何本もの小さな腕が上へ下へと一生懸命になって動き回った。“サーサーサー”きめの細かい煙のような砂が私達の指の間から、手のひらから、こぼれ落ちて下に置いた鉢の中に落ちていった。それはまるでしゃれたカーテンのようであり、流れてゆく水のようにもあった。

土を取り終わり、字の練習も終わると、私達はすぐに榆の木の下へ行き、射撃の練習をした。銃は大工さんに作ってもらった。形が出来上がるとそれに色を塗る。大黃の葉っぱを二枚ほどちぎってクルクルッと巻き、それで銃の上をシュッシュと擦ると、黄色のなかに紅色が浮き上がり、まるで油を塗ったように光ってくる。今度は墨汁を使って銃の先を黒く塗る。飾りに赤いリボンを付けてみた。穴を二つ空けて、背負い帯をつけ、銃を背負う。本物のような気分だった。私達は銃を背負って榆の樹の下に集まり、騾先生がお手本を示してくれるのを見守った。先生は若いときに兵隊として日本軍と戦ったそうだ。先生はくわえていたキセルを口から抜き出し、“バン、バン”と靴底にぶつけタバコを捨て、また腰のベルトに差し込んだ。羊皮の上着をさっと脱ぎ捨てると辺りに有った一本の榆の枝を取り上げた。“注目!”“気をつけ”と号令がかかった。先生は両手で“銃”を握り、しっかりと胸の前に抱え、少しも身動きをせず前方を見据えた。すばやく銃を前へ向けながら足を踏み出した。左足を曲げ、右足を踏ん張り、手の中の銃を前に後ろに、左に右にと舞うように動かした。その姿は力強く勢いがあった。最後にクルリと身をひるがえし

“撃て!”、まるで雷の轟きのような迫力だった。

驟先生はすでに九十歳の高齢になられたが今も元気だ。榆の老木は今も枝は太く、葉をたくさん茂らせている。あの榆の木は二十数年も前のことなどまだ覚えているだろうか。 [2001年4月号から転載]

- 李晴さんは、中国山西省太原市に住む女性作家です。故郷の河曲地方の生活を題材にした味わい深い作品を多く発表しています。2001年の‘わんりい’に寄稿頂き掲載しましたが、再び読み返してみても、私達が親しむ中国とは異なる、中国僻地の農村に住む人々の生活や心情を味わえるようです。折々の機会に‘わんりい’に掲載致します。(編集室)

三日間のハルピン訪問 佐藤紀子(張恰申)

私は山形出身の友人訪問の為、友人の勤め先ハルピンを、11月8日から11日まで3日間訪ねました。

友人の勤め先は、ハルピンにある「日本料理鈴蘭」。「日本料理鈴蘭」はハルピン出身の^{ランイ} 樂偉(栞伟)氏が、89年に筑波大大学院を終了後の94年に開業した店です。ハルピン駅から徒歩で20分ほどの南岗区漢水路にあり、創業者の^{ランイ} 樂偉氏が購入した建物です。漢水路はハルピン改革開放以来初めての商店街です。当時のハルピンで唯一の日本料理店鈴蘭は、反日デモにもあまり影響が無かったそうです。山形の友人は2000年から日本語講師として赴任、18年経った今も勤めています。当時の「鈴蘭」は写真の左側の建物だけでした。

友人は日本語の他に、日本のサービス精神を始め、山形の土産、民芸品を「鈴蘭」に取り入れました。店の食器など割れるものは、すべて手持ちで日本から持って来たのです。店は繁盛しつつあり、創業者のランイ氏は右側の建物も入手出来ました。そして新潟の民芸品、などを取り入れ、「新潟の部屋」を設けました。店の中には広々とした空間ができて、まるで新潟の美術館のようです。今のハルピンには日本料理店が増え、激しい競争の中です。しかし「日本料理鈴蘭」は家賃の支払いがないから、勝ち組です。これからは「日本料理鈴蘭」二軒の建物を一つにして、もっと日本らしい看板作るということです。

11月10日友人とアジアで最も長い歩行街ハルピンの「中央大街」を散歩しました。「中央大街」は建設された当時の「中国大街」で、意味は中国人の住む町です。私は寒くて鼻水が止まらないけど、中央大街の“冰棍”の店頭が賑やかです。友人は、氷祭りの時でも、



ハルピンの「日本料理鈴蘭」

冰棍(アイスクャンデー)が相変わらず大人気だそうです。ハルピンでは、“冰棍”の他“紅腸(ロシア風ソーセージ)”、“面包(パン)”も人気で、ハルピンではほとんど人が“紅腸”を作ります。

中央大街はヨーロッパ風の町です。中国にいるのに、外国の趣に溢れています。ロシア料理、日本料理、韓国料理、中国東北料理、美食の町です。ヨーロッパみたいな町に、東北田舎料理“大拉皮”大繁盛、不思議な感覚です。

11月は、観光客が最も少ない時期で、夏と冬が観光のシーズンです。涼しい夏の“美麗的松花江畔”は、ロマンティックな揺り籠。冬の“冰灯”は美しいロマンティックの頂点とも言えます。凍った松花江の上で人々が思いっきり楽しんでます。結婚式場として利用されることもあるそうです。

私は3日間だけの友人訪問でしたが、ハルピンのイメージがずいぶん変わりました。皆さんも時間のある時に、ぜひハルピンにある中央大街と美しい日本料理鈴蘭を見に行ってください。

行って来ました！‘わんりい’企画・陝北の旅・報告その-Ⅱ

橋 詰 滋

★3日目(9月24日)

朝はあいにくの雨。昨日までの暑さとうって変わって、この日はかなり肌寒い。風邪を引かなければいいのだが。

この日は中秋の名月だというのに、なんていうことか。夜には晴れるようお願いばかり。

柳田氏より、部屋のシャワーがチョロチョロしか出ずに、前の晩はシャワーを思う存分浴びることができなかったとの話がありました。柳田氏の隣の部屋に宿泊していた私の部屋は、逆にシャワーの出が大変良かったのですが、もしかしたら私がシャワーを使用していたから、隣の部屋の出が悪かったのではないのかと今でも考えてしまいます。この日以降、宿泊するホテルでは、誰かの部屋で必ずトラブルが発生することになります。

朝食は、バイキング形式でありましたが、何か、もの足りない感じがしました。何かと言いますと、飲み物が無いのです。コーヒー、牛乳、ジュース、お茶の類がなく、申し訳ない程度にお粥があるのみで、喉を潤した気にはなりませんでした。

8時半に近くの宝塔に向けて徒歩で出発し、10分ほどで到着しました。途中、マンホールの蓋が少し開いている箇所があり、柳田氏が穴の中に落ちてしまうのではないのかという危機もありましたが、氏の運動神経が良いのか分かりませんが、

寸前のところで落下を回避することができました。経済発展が著しい中国であります、街中では、上のようにマンホールの蓋が開けっ放しであったり、交通整理中の警官がスマホでゲームをしていたり、日本では考えられない光景を見ることができます。

宝塔の入場料は、例のごとく、ご年配の方は無料であり、私のみ60元を支払いました。カートで宝塔がある頂上まで登り、時間があまりなかったため、宝塔の中に入らず、宝塔を下から眺めるだけでした。

ちょうど、この日は、中国国内の少数民族関係のイベントが近くであったようで、様々な少数民族の団体が観光に来ていました。特に、雲南省の彝族の女子の顔立ちと民族衣装が綺麗であったため、記念写真の撮影に人だかりが出来て、我々も記念に撮らせてもらいました。左下に掲載してあるのがその写真です。中国の観光地では、よく少数民族の方と記念写真を撮ると、有料であることが多いが、彼女らは記念撮影に無料で応じてくれて、本当にありがたかったです。

我々は宝塔見学を終え、ホテルに戻り、そこからバスで5分くらいのところにある延安革命記念館に移動しました。中国共産党の設立、八路軍等に関する文物を展示している博物館であり、敷地



彝族の女性と記念撮影



毛沢東のベッドルーム



千年古窟の前で案内人の男性と記念撮影



黄氏、趙氏を囲んでの夕食会

内には毛沢東や周恩来等の中国共産党の指導者らの旧居もありました。

毛沢東の旧居の部屋のベッドがダブルベッドであったことに対して、浪花氏と私だけが気になりました。気にしすぎですかね。

革命博物館で2時間くらいを費やし、近くの食堂で昼食をとった後、バスに揺られ、2時間かけて、今回の旅行のメインテーマである乾坤湾に向かいました。道中、黄さんの漢詩講座がありましたが、その後、食後のため、みなさんは夢の中に入ってしまった。運転手の趙氏(前回の記事では「張氏」と誤って記載)には、お仕事とは言え、ただ一人だけ運転をさせて、本当に申し訳ありませんでした。趙氏の運転は、非常に丁寧であり、高速道路上のトンネルの無いところは100kmを維持し、トンネル内では80kmまで減速して、安全運転に心がけていました。

14時半に我々は乾坤湾黄河博物館に到着しました。乾坤湾とは、黄河が大きくUの字型に蛇行する場所です。乾坤湾黄河博物館にて、黄河の地理、乾坤湾の蛇行の形成過程等について見物しました。

1時間ばかりの見物の後、この日の宿に移動しました。一般の車は、博物館から先の乾坤湾景区に入ることができないため、専用のバスに乗り換えて、宿まで移動しました。

宿に到着後、今朝の柳田氏のシャワーのトラブルの話の思い出し、早速、自室のシャワーのチェックをしたところ、今度は、自室のシャワー

の出がチョロチョロでしか出ていませんでした。他の方の部屋はそのようなことはなく、自分だけトラブルに当たったみたいでした。フロントでトラブルの内容を伝えたところ、急遽修理をするということであったため、安心しました(後でシャワーの出が良くなったことを確認しました)。

少しの休憩後、町を散策しましたが、宿の前に1軒の商店と千年古窟(1000年以上前のヤオトン)があるのみで、何も無い寂しい町でありました。千年古窟に近づいたとき、どこからともなく、その持ち主の男性が現れ、頼んでいないのに、彼が案内をはじめました。当初、入場料の表記がないため無料かと思っていましたが、後から、一人10元(当初の言い値は50元だったらしい)の案内料を請求されました。更に外国人の訪問が珍しかったのか、日本の硬貨も欲しかったため、私は10円玉を柳田さんは50円玉を彼にプレゼントしました。

この日の夕食は、宿内の食堂で黄氏、趙氏を交えてとりました。この日は中秋の名月を祝して賑やかに行いましたが、結局、夜まで雨が上がることはなく、肝心の名月は雲隠れしてしまい、鑑賞することはできませんでした。テレビのニュース番組で流れていた名月の映像で我慢するしかありませんでした。この食事会の中で、自分よりも若いと思っていた趙氏(当初、30代かと思っていました)が、実は自分よりも9歳も年上の52歳であり、お孫さんがいることに驚かされました。いつまでも若々しいのはいいことです。



雨の乾坤湾



会峰寨

★4日目(9月26日)

この日も朝から雨。前日より更に寒く、10℃を切っていたと思います。天気予報では、この日の最高気温は13℃とのこと。あまりの寒さに、冬山登山用のジャンパーを着ることになりました。当初予定していた羊皮の浮き袋のボートによる黄河の渡河は中止となりました。

起床後、朝食をとりましたが、昨日の延安でのホテルの朝食同様、飲み物がなく、申し訳ない程度にお粥があるのみでした。

食後、ホテルを8時15分頃に出発し、まず、我々は黄河の蛇行が絶景と言われている乾坤湾に向かいました。

乾坤湾では、雨で足元が悪かったため、転倒しないよう、足元を気にしながら見学をしました。雨で、あまりよく見ることができませんでしたが、晴れたら絶景だっただろうと思います。

続いて、清水湾へ移動し、まるで水墨画を描いたような黄河の絶景？、または東洋のマチュピチュと言われる絶景？を楽しみました。(東洋のマチュピチュ？または中国の竹田城(勝手に命名)？と言われる岩山がありますが、撮影地から山の頂上に行って帰ってくるまで、2時間くらいかかるため、今回は諦めました。)

黄河を初めて自分の目で見ましたが、川幅が1キロ以上あり、まるで下流の川幅であるように感じました。実はここは河口から2000キロ以上の上流にあることを知り、その大きさに驚かされました。

2時間くらい黄河の風景を楽しんだのち、周遊バスでホテルに戻り、荷物を回収し、再度周遊バスに乗り込んで、前日の乗り換え地点まで移動しました。

乗り換え地点で昼食をとり、この日の最終目的地である文安駅に移動しました。

昼食後であったため、例のごとく、趙氏以外は夢の中に入ってしまう、1時間半後くらいに文安駅の高速度道路のインターチェンジに到着しました。

文安駅に行く前に、少し時間がありましたので、国家主席の習近平が青年時代に下放された梁家河村に立ち寄りしました。梁家河村に入るために、空港に置いてあるようなX線の手荷物検査機に手荷物を通してからでないと、入村することができませんでした。手荷物検査後、専用のバスに乗り換えて梁家河村に向かいましたが、そのバスの運転手の運転が雨にも関わらず速く、前の車を煽っているような走りであったため、思わず黄氏が「速すぎる」と専用バスの運転手に対し注意をしました。

我々は、この後に思いがけないトラブルに巻き込まれることなんて知らずに、呑気にこの乱暴なバスに揺られながら梁家河村に向かうのでありました。紙面の関係で今回はここまでとさせていただきます。

今回掲載の写真は全て浪花氏からのご提供によるものであります。ありがとうございました。

(続く)

参加しました！第21回 町田発国際ボランティア祭・2018 夢広場

まちの駅・ぽっぽ町田 イベント広場 2018年11月3日(祝)

今年も国際ボランティア祭が、盛大に開かれた。主催は、町田国際交流センターを中心とした「2018 夢広場実行委員会」で、町田市などが後援している。

11月3日は「晴」の特異日だそうだが、今年も朝から晴天となった。会場の「ぽっぽ町田」には広場があり、「わんりい」を含め13の団体が各国の民芸品などを出店した。参加国は、「スリランカ」、「シリア」、「ネパール」、「フィリピン」など国際色豊かで、国際ボランティア活動祭に恥じない内容であった。

祭りは10時から、町田市文化・国際交流財団の鷺北理事長の挨拶で始まり、開会式終了直後、「わんりい」お馴染みの永瀬正博さんによるモンゴルの民族楽器・馬頭琴の演奏からスタート。モンゴルの大地と天空に響くような演奏であった。その後、オカリナ演奏、山下孝之さんとその教室の生徒さんによるケーナ演奏と続いて行った。

「わんりい」のブースは、今年もラオスの山の民・モン族への支援でモン族の女性たちが丹精込めて刺繍した美しい大小のポーチやブックカバー、ペンケースなどを販売した。刺繍の色合いやデザイン的美しさに、足を止める方も多く、売り上げに繋がった。

昨年、一昨年と出演され会場が大いに盛り上がった、男性の女装パフォーマーである「レディー・ビード」さんの出演はなかったが、フィリピンの女性10数名によるダンスは迫力満点で通りすがりの人

達も足を止め拍手を送っていた。フラダンスもあり活動的で色彩豊かなパフォーマンスが続いた。14時から、「わんりい」ボイストレーニング講座・講師のEmmeさんによるボイス・トレ体験講座。頭の先からつま先まで動かし心の底から思い切り声を出して練習した上で「赤とんぼ」を会場のみなさんと歌った。筆者は



笑顔でボイス・トレ指導をする Emme 講師



迫力満点のフィリピン女性たちのダンス

歌はあまり得意ではないが、少し上手になった気がしている。

16時に閉会したが、主催者の発表では400人余りの来場者があったそうで、秋晴れの中、それぞ

れが心豊かに楽しんだ一日となった。

なお、この夢広場には「2018町田発夢広場宣言」がなされ、地球上すべての人々と手を携えるべく、「この星に平和と希望を」のスローガンが掲げられていたことを書き添えたい。

(報告：寺西俊英)

中国の雑穀粉料理の会 そのI

料理講座・高粱の粉の蒸餃子と豌豆粉の葱餅 講師：^{ウー ヤオフォン} 吳躍鳳 (中国瀋陽市出身)

まちだ中央公民館・調理室 2018年10月23日(火) 参加者：15名

長野のおやし講習会の折、参加された吳躍鳳さんが余って残った皮種をくるくると巻いて中国風のおやしを焼いてくださった。その手つきがとても鮮やかで参加者一同ほれほれと見とれた。

吳さんの出身地・瀋陽は中国東北部に当たり寒冷地でおコメの生産にはあまり向いていない。勢い主食は粉に頼ることが多く様々な素材の粉を使った食文化がある。

‘わんりい’会員の岩田温子さんが、10月号の‘わんりい’に寄稿くださったようないきさつで中国の友人から頂いた雑穀の粉を‘わんりい’の料理講座用に提供下さった。粉の種類は、高粱、蕎麦、豌豆、餅黍、玉米(トウモロコシ)の5種類でそれぞれ約1kg近くあった。未来食として雑穀食は健康維持を目的にきつと脚光が当たるに違いない。雑穀はビタミンやミネラル、ポリフェノールを多く含むものがあり、老化防止や免疫力アップに効果があることが分ってきている。

2回に分けて講習頂くことにして今回は高粱粉を使った蒸餃子と蕎粉(そば粉)を使った葱餅の予定だった! 正に「予定だった!」のだ。 報告のタイ



吳躍鳳さんとイエリンさんの共同作業で高粱粉の餃子をデモする

トルから蕎粉が消えた。実は、前日料理講座の材料として、5種類の粉が入った箱から、ラベルを確認して高粱粉と蕎粉を選んだ。取り出した蕎粉はなんと意表を突いた黄色。その時に「アレ?」と思った。が、中国にはこのような黄色い蕎麦粉があるのかも…」と、ラベルを信じてすぐ納得してしまった私の早とちりで、会場に着いて吳さんに鑑定して頂くと、なんと豌豆粉だった! 「アレ?」と思った時にもう少し粉をきちんと吟味するべきだった



講習風景

のだ。すべては後の祭り、結局、蕎粉の葱のおやしは豌豆粉の葱のおやしにムリムリ変更し、料理講座のタイトルが変わった。

が、流石、粉食文化圏の吳さん、慌てず、豌豆粉は粘りが無いからと豌豆粉に通常の倍量の小麦粉を加えて捏ね、蕎粉の葱餅ならぬ豌豆粉で焼いた葱のおやしは、かすかな甘みもあってそれなりに美味しかった。

蒸しがあがった高粱粉の餃子は真っ黒

で、まさにポリフェノールたっぷりといった感じだった。小麦粉の餃子よりもっちりした感じがあって腹持ちもよさそうだ。

併せて、指導頂いた呉さん風のマーボ豆腐は、豆腐をしっかり水切りし、材料を整えて置けば僅か4、5分そこそこであっという間に仕上がった。街で食べるマーボ豆腐はいろいろだが、変な甘みやくず粉のどろんとした感じもなく、花椒の香りが鼻をくすぐり、これこそマーボ豆腐という美味しさだった。翌日、娘が来たので早速、作って披露した。二人分には多すぎる量だったので残ったが、「美味しい。家でも食べたい」といって残りを持ち帰った。

(報告：田井光枝)

【今回のランチメニュー】

- ①高粱粉の蒸餃子、②豌豆粉の葱のおやき
- ③呉家風のマーボ豆腐、
- ④白きくらげと蓮、胡瓜の中華サラダ
- ⑤トウモロコシと卵のスープ
- ⑥‘わんりい’特製生クリーム入りの杏仁豆腐



テーブルに並んだご馳走

◇わんりい活動報告③

中国の雑穀粉料理の会 そのⅡ

料理講座・西太后が愛した玉米の蒸しパンと蕎麦粉の蕈入りクレープ風

講師：イエリン [叶霖] (中国瀋陽市出身)

麻生市民館・料理室 2018年11月15日(木) 参加者：12名

前回に引き続いて、中国西北地方でよく食べられている中国の雑穀粉料理の会として、今回は玉米(トウモロコシ)の粉と蕎麦粉を使用した料理を指導頂いた。講師はイラストレーターとしても活躍のイエリンさんで、日本のキャラクター弁当を中国に紹介して中国の若いお母さん達から熱い眼差しを受けている。前回、指導をお願いした呉躍鳳さんは、イエリンさんのお母さんである。

さて、玉米の蒸しパン(中国名：玉米窝窝头 [yù mǐ wō wō tóu] [日本文字：玉米窩窩頭])はもともとは中国北方地方の貧しい農民たちの日常食だったとのことだが、清朝末期、北京からの逃亡を余儀なくされた西太后が途中の村で食した玉米窝窝头が忘れられず宮廷に戻った後もテーブルに並べさせたといわれている。

豊かになった中国では健康維持の為に近年になって雑穀にスポットライトが当たるようになって、中国のサイトを検索するといろいろな雑穀粉の料理が掲載されており、玉米窝窝头も蕎麦面蕈菜餅も様々な作り方がアップロードされている。‘わんりい’



講師のイエリンさん(右)は呉躍鳳さんのお嬢さん

HPのcookingのページで作り方を紹介してあるので、ご覧いただければ(<http://wanli-san.com/cooking/cooking%20title.html>)と思うが、イエリンさん指導の玉米窝窝头では、白玉粉と玉米を同量使用し、もっちり滑らかでほのかに甘く、上等の和菓子のような舌触りでとても美味だった。

玉米の粉も蕎麦粉も日本で比較的手に入り易いので、日本の食生活に取り入れるのは容易と思うので是非試してみたい。(報告：田井光枝)



さあ、今日のランチの準備完了!

イエリンさんが編集した今日の料理メニュー特集写真



凉拌豆腐

銀耳蓮子湯

玉米窝窝头

東坡肉

蕎麦面韭菜餅

【今回のランチメニュー】

- ① 玉米窝窝头 (トウモロコシ粉の蒸しパン)
- ② 蕎麦面韭菜餅 (そば粉の韭菜入りクレープ風)
- ③ 茹でて、焼いて、蒸して作るほろほろの東坡肉
- ④ 凉拌豆腐 (豆腐の中華サラダ)
- ⑤ 白菜とワカメと湯葉の中華風スープ
- ⑥ 銀耳蓮子湯 (白きくらげと蓮の実のデザート)

SAMIRA
イラスト館
2018年12月

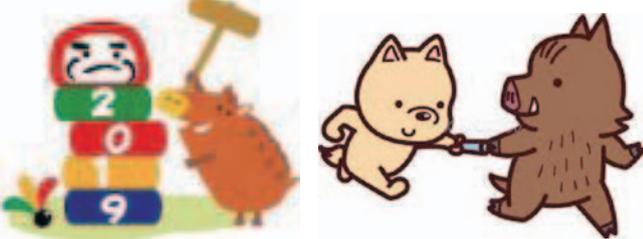


皆さんは、サミラさんのイラストからどんなことをイメージされますか。

●恒例! 'わんりい' 新年会日取り決定!!

2019 'わんりい' 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう!

- **場所:** 麻生市民館・料理室
小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内
- **日時:** 2019年2月3日(日) 11:00 ~ 14:00
- **定員:** 先着40名('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- **参加費:** 1500円(会場費、シュワンヤンロウ材料及びビンゴ景品購入)
- **申込:** メール: wanli@jcom.home.ne.jp
TEL/FAX: 042-734-5100(わんりい)



●【わんりいの催し】中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!! 録音機をお持ちの方はご持参ください。

- **会場:** まちだ中央公民館
- **日時:** 10:00 ~ 11:30、
12月16日(日)第3・4学習室
2019年1月13日(日)視聴覚室
- **講師:** 植田渥雄先生 桜美林大学名誉教授、現桜美林大学孔子学院講師
- **会費:** 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- **定員:** 20名(原則として)
- **申込み:** ☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp (有為楠)



●【わんりいの催し】

ボイス・トレをして日本の歌を美しく!

漢あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体のを抜いて、気持ちよく発声しよう!! 声は健康のバロメーター! 気持ち良く歌って毎日元気!!

- *動きやすい服装でご参加ください
- **会場:** まちだ中央公民館
- **日時:** 10:00 ~ 11:30、
12月11日(火)視聴覚室
2019年1月29日(火)視聴覚室
- **講師:** Emme(歌手)
- **会費:** 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- **定員:** 15名(原則として)
- **申込み:** ☎042-735-7187(鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



●初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】

季節の花など水墨画で描いて楽しんでみましょう。体験参加1000円です。手ぶらで参加OK! 見学は無料です。気軽に教室を覗いて見よう!!

- **講師:** 満柏
- **会場:** 鶴川市民センター
町田市大蔵町1981-4
※駐車場あります
- **日時:** 第2又は第4月曜日、
14:00 ~ 16:00
- **体験参加費:** 1000円(見学無料/手ぶら参加OK)
- **問合せ:** ☎042-735-6135(野島)



使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついでに折に田井にお渡し下さい。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話、これとは思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

尚、'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎しています。年度途中に入会の方には会費の割引があります。

お気軽に問い合わせください。

年会費: 1500円 入会金なし

'わんりい'振替口座(郵便局) 00180-5-134011

徐福映画上映延期のお知らせ

12月上旬に、かながわ県民センターで予定していた徐福映画「徐福～永遠の命を探して～」の上映は、主催者の都合により延期します。上映日程は決まり次第、当会ホームページでお知らせします。ファンの皆様には大変申し訳なく存じます。

神奈川徐福研究会

● 中国文化センターの催し

「中国・日本印象」—馮学敏写真展

「中国・日本印象」写真展は、在日中国人の写真家・馮学敏の三十年来の写真創作活動の集大成の一つとして、60枚の作品を精選。「映像詩人」とも称される馮学敏の、中国の歴史や文化に対する思い、そして第二の故郷である日本の風俗習慣に対する理解や思いを、写真を通して伝える。



馮学敏さん

■ 日時：12月12日(水)～12月26日(水)、土日祭休
館10:30～17:30(最終日：13:00迄)

■ 会場：中国文化センター(港区虎ノ門3-5-1
37森ビル1F)

■ 主催：馮学敏写真展実行委員会、中国文化センター
◆ 展示の内容に関する問い合わせ：馮学敏(フ
オン・シュエミン)
E-Mail: fxm126@gmail.com

▲ 特別企画講座

① 馮学敏「中国印象」12月17日(月) 15:00～17:00

② 馮学敏「日本印象」12月19日(水) 15:00～17:00

■ 会場：中国文化センター ■ 募集は先着80名迄

■ 申込み期間：12月16日まで

※ 参加希望される方は中国文化センターイベント案内
(<https://www.ccctok.com/event/>)よりお申し込みください

● 姜小青コンサート2018

～心に響く古筝の調べ～

友情出演：西川啓光(歌舞伎囃子小
鼓演奏家)



■ 日時：12月25日(火) 18:30
(開場:18:00)

■ 会場：GINZA Lounge ZERO
中央区銀座7-5-4 毛利ビル7階

◆ 3,000円(自由席)

▲ 終演後、姜小青を交えての懇親パーティー開催予定

■ 懇親パーティー：19:45～21:45

■ パーティ参加費：7,500円(食事、フリードリンク付き)

■ 主催：姜小青フレンドリー実行委員会

■ 予約&問合せ：

☎ 03-6274-6631 (GINZA Lounge ZERO)

☎ 080-1304-7347 (村山)

【12月定例会開催日及び新年号‘わんりい’発送予定】

◆ 問合せ：☎ 044-986-4195(わんりい)

● 定例会：12月7日(金) 13:30～
三輪センター・第三会議室

● 新年号‘わんりい’発送日：12月28日(金) 10:30～
三輪センター・第二・第三会議室(※弁当持参です)

今年は天候不順と自然災害が続きましたが、いよいよ12月を迎えます。‘わんりい’としては各方面のご支援と会員各位の協力によって25周年記念活動を無事終了の記念の年でした。皆様のご健康をお祈りすると共に、‘わんりい’への変わらぬご支援をよろしくお願いします。(寺西俊英)

● 【新着ニュース】絵本「セロ弾きのゴーシュ」

会員の佐藤紀子(張怡申)さんが、絵本「セロ弾きのゴーシュ」を出版されました。絵を描かれた「毛毛龍」は佐藤紀子さんのペンネームとのことです。購入の詳細は、「セロ弾きのゴーシュ 毛毛龍」でネット検索できます。

■ 佐藤紀子さんから直接購入可です。価格1080円(税込)

張怡申 E-mail:shanghainorinori@gmail.com

絵本「セロ弾きのゴーシュ」
作 宮沢賢治
絵 毛毛龍(佐藤紀子)
ISBN978-4-286-19630-5 文芸社

ご購入案内
全国の書店にてご注文が可能
・送料 無料
* 受付開始期間：十一月下旬
ブックサービスでのご注文(本の宅配サービス)
TEL: 03-6274-6631(年中無休 ※年末年始は除く)
・ FAX: 03-6274-6635(年中無休)
* 受付開始期間：十一月下旬
アマゾン/紀伊国屋書店/楽天ブックス/セブンネットショッピング等の大手ネット書店にてご購入が可能
* 受付開始期間：十一月下旬
(※上記の受付開始期間に)注意下さい。
期間前に注文をキャンセルされる場合がございます。
毛毛龍のところでもご購入受付が可能
いつもありがとうございます。
ご注文は私の方からお受け付けております。
携帯 080-1105-9620
E-mail: ehon.maomalong@gmail.com

▶ ‘わんりい’ 239号の主な目次 ◀

「寺子屋・四字成語」⑩相敬如賓……………2
論語断片(42)「君使臣以礼」(君、臣を使うに礼を以てす)…3
五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(4) ……4
東西文明の比較(30)「古事記」と「日本書紀」 ……6
四姑娘山写真だより⑨ 女王谷の石積み塔 ……8
「漢詩の会」⑥『臨安の邸に題す』
『夜受降城に上りて笛を聞く』 ……9
海外出張の思い出・旧ソ連⑩ ……12
驟馬先生 ……14
三日間のハルピン訪問 ……15
陝北の旅 報告Ⅱ ……16
活動報告①「2018夢広場」 ……19
活動報告②③「中国の雑穀粉料理講習会」 ……20
サミラさんのイラスト館 ……22
‘わんりい’掲示板 ……23、24